脳小血管病　その2

医学にも、次々、トピックスが出る。その都度、検討するのもタイヘンだ。そして、他にも、医者はなにかと忙しい。

確か70歳を過ぎたはずのYさん。ある日、居酒屋で一緒になった。「センセ。私も、頭の検査をしたら、白質病変とかいうのが見付かりましてね」と、話しかけられた。たまたま、頭のMRI（磁気共鳴画像）の検査をした。「脳小血管病（SVD）」が見つかったらしい。担当した医者は、心配ないという。が、「ホント、認知症は大丈夫か？」という相談である。急に酔いがさめてきた。もちろん、話したいことは山ほどある。だが、ワッシーは、Yさんの診察もしていないし、MRIの画像も見ていない。この先どうなるかなど、深刻な質問に答えようがない。

高齢者に多くみられる脳小血管病（SVD）は、多くは無症状なことが多い。だが、進行すれば、それだけでも認知症を引き起こす。脳血管性認知症の半数を占めているのだ。いや、それだけではない。SVDとアルツハイマー型認知症（AD）は高い確率で合併するのである。しかも、SVDは、ADの症状が出るずっと前に、しかも、アミロイドβの沈着に先行してみられるというではないか。

SVDによって、脳の血液脳関門の働きが落ち、神経細胞に必要な物資が入りにくくなる。逆に、不要なもの、例えばアミロイドβなどの排出障害が起きる。と、SVDは、ADを発症させたり、進行させるということも考えられる。まるで、アミロイドβが悪代官で、SVDは越後屋みたいなものではないか。おー、コワ。

赤ら顔で肥満体のYさん。血圧も高そう。脳小血管病の危険因子をたくさんお持ちのようだ。おっと、もう呂律（ろれつ）が回りにくそう。「お酒はほどほどに」と、ついおせっかいが出る。今宵（こよい）のワッシーも悪酔いしそうである。

（石黒修三＝いしぐろクリニック・脳神経外科医：　3/21　北國新聞掲載）